高山寺と鳥獣人物戯画

山根 佑基
（2018 年度入学　鈴木ゼミ 2 期生）

私は最近、名画について、それが書かれた経緯や表している事柄、それを描いた画家の人柄や美術的な技法の話について知識を深めることが趣味の一つになっている。フィンセント・ファン・ゴッホはなぜ同じような構図の「ひまわり」という絵を何枚も書いたのか。レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた「最後の晩餐」は当時の他の絵に比べてなぜあそこまで劣化が激しいのか。ミケランジェロの「最後の審判」には何が描かれているのか。画家の性格や当時の社会背景とともに絵画を見ると、「美しい」という言葉だけでは洗うことのできない、それぞれの名画が持つ奥深さを感じることができる。今回は、京都に存在する数々の絵画の中でもとりわけ有名な「鳥獣人物戯画」とそれが保管されている高山寺について、文化的な面白さを感じながら「鳥獣人物戯画には何が描かれているのか」について触れる。

と、書き出してみたが実際のところ鳥獣人物戯画は「誰によって描かれたのか」「そこに何が表されているのか」が全くわからない。基本的な情報でわかっている部分からあげていくと以下のようになる。

①高山寺に保管されている紙本墨画の絵巻物である。

②甲、乙、丙、丁の四部構成からなり、全長は 44m である。

③12-13 世紀という幅で、筆跡などからおそらく複数の作者によって描かれたこと

④名前からも分かる通り、カエルやウサギなどが擬人化されて描かれている箇所が代表的で、戯画の集大成である。

②に関しては驚く人もいるのではないだろうか。私たちがよく目にするカエルとウサギの相撲の様子は甲巻のほんの一部でしかなかったのだ。甲巻は擬人化された動物を描き、乙巻は実在・空想上を合わせた動物図譜となっている。丙巻は前半が人間風俗画、後半が動物戯画、丁巻は勝負事を中心に人物を描かれている。

私が小学校の頃、恐らく国語の授業だったと思われるが、鳥獣人物戯画は「日本最古の漫画」であると教わった。確かに一部には現在の漫画に用いられるような効果に類似した手法が見られる。しかしながら最近の研究において、高山寺の成り立ちや高山寺での本絵巻の格付けから、何かしらの宗教的意味合いが含まれている可能性が高いとし「日本最古の漫画」と称するには否定的な意見が主流となっている。

では、高山寺はどのような成り立ちからでき、鳥獣人物戯画の格付けはどうなっているのだろうか。高山寺は京都市右京区梅ヶ畑栂尾町にある。創建は奈良時代だとされているが実質的な開基となったのは鎌倉時代の明恵である。明恵坊高弁は 1173 年に和歌山県で生まれた。父は平重国という武士であり、母は紀州の豪族湯浅家の娘であ

った。幼時に両親を亡くした明恵は、9歳で生家を離れ、母方の叔父に当たる高尾山神護寺の僧・上覚のもとで仏門に入った。明恵は華厳宗の復興に努めた。華厳宗とは中国大乗仏教の一つである。大乗仏教とは、出家したものに限らず在家者を含めた一切の衆生の救済を掲げるものである。華厳宗の思想では仏になることを目的とするのではなく、最初から仏の立場に自分を置いて考え、行動することを求めるなど、かなり独自の考え方が存在する。さらに開基となった明恵自身もかなり独特な人柄だった。若き日には求道の思いから右耳を自ら削ぎ落としたそうだ。痛みのあまり薄れゆく意識の中で文殊菩薩をみたという話が残っている。また、彼女は法然の唱えた「専修念仏」を痛烈に批判したが法然自身とは終生交誼を絶やすことはなかった。教えの違いから争いに発展することはこの時代珍しいことではないと考える。その中で、「信じる教え」と「その人自身」を分けて、教えの中では対立するが人としての交流は絶やさない関係を持つことができるのは稀有だと感じる。さらに、明恵は独特の個性から数々の和歌を読んだことでも知られる。中でもとりわけ有名なものが、「あかあかやあかあかあかや　あかあかや　あかあかあかや　あかあかや月」というものがある。これは月が明るいことを感性のままに表したものである。

　このように独特な人物が開基となった高山寺には様々な国宝や重要文化財が保管されているが、別格の扱いを受けている物が三つある。華厳宗の祖とされる義湘と元暁の伝記絵巻である「華厳宗祖師絵伝」、高山寺の開基である明恵上人の「樹上座禅像」、そして「鳥獣人物戯画」である。これらがひとつの箱に収められた状態で長く保管されてきた。このことから、「鳥獣人物戯画」は単に漫画の技法が用いられた戯画集ではなく、明恵上人の宗教的に重要な教えが絵として表されているのではないかという説があるのだという。その理由として、釈迦の入滅を描く「涅槃図」には鳥獣人物戯画で描かれるような動物や神話の生き物たちが描かれることがある。もしこの説が正しかったとして、どのような教えが記されているのかについてはまだ明らかにされていないそうである。このことを踏まえて、明恵上人が生きた高山寺を訪れたり、鳥獣人物戯画を眺めながら教えの内容について想像を巡らせてみたりするのも趣があって良いと感じる。ぜひ一度訪れてみたい、私の好きな京都である。

【参考文献】
・栂尾山高山寺公式HP
https://kosanji.com/chojujinbutsugiga/